みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

国立民族学博物館研究報告別冊 no.007; まえがき

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長野, 泰彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/3473

ま　え　が　き

長　野　泰　彦

本書は昭和60-62年度国立民族学博物館共同研究「Asianized India の宗教と言語」の成果の一部である。

Asianized India とは，仏教やシャマニズムが往き来し，独特の文化複合を形成してきたインド亜大陸北部からチベットを包括する概念的地域名称で，ヴェーダ以来の伝統を保持しようとする傾向の強い地域としての Vedic India と対比される。本共同研究での「Asianized India」は一応このような意味に限定されたものとして出発したのである。

しかし乍ら，実はこの用語はもっと広いいわゆるインド世界の把握の仕方と深い関わりを持っている。上にインド・プロパーとしての Vedic India を挙げたが，これとて，ヴェーダ以前の伝統との接触によって醸成されてきたもので，純粋にアーリア的とは到底言えない。Vedic India でさえ，既に文化複合の所産なのである。

そこでの複合文化形成のメカニズムを考えるにあたり，我々はふたつの極からの動きを認めることができる。ひとつはサンスクリット語の担い手である上層文化による汎アジア的土着要素の消化（M. エリアーデの言う Asianized India の中核的概念）であり，もうひとつは，民俗文化を背負う層によるサンスクリット文化の模倣吸収 (M. N. シュリーニヴァースの言う Sanskritization) である。「Asianized India」という用語は，このような文化複合形成動因の切り方としても相当の有効性を持っているため，我々の研究は結果的には，Asianized India を地域名称に限定しない方向で展開してきたように思われる。

本研究は上述のような事情から，基礎的研究資料の整備をテーマ別に行なう作業会と，インド・チベット文化圏理解のための視点を検討する全体会とを平行させた。

全体会においては，従前のインド・チベット文化圏研究の方法についての批判が行なわれ，エリアーデやシュリーニヴァース，デュモン等の理論，及びその修正理論の限界を克服するための方法が模索された。その結果，インド文献学・チベット学・比較言語学が積み重ねてきた通時的視点を，社会構造論・文化人類学・記述言語学の共時的視点と突き合わせて総合的なインド・チベット文化圏理解を目指す新たな共同研

究を現地調査を中心に展開すべきだとの方向が打ち出された。この方向は62年度から文部省科学研究費補助金による海外学術調査研究『ガンジス河流域の複合文化形成動因の比較研究』として実現され，現在調査が進行中である。

基礎資料を整えるためのテーマ別作業会として，1チベット文化に関する高度の入門書を編纂する班，2インド・チベット図像研究班，3チベット文献解題作成班，の三種を設け，各年度ともべ約15回の研究会をもった。

1の成果は，長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』(1987　冬樹社）として結実しており，又，3の成果も Tachikawa & Nagano (eds.) "A Catalogue of the United States Library of Congress Collection of Tibetan Literature in Microfiche" (1989 国際仏教学研究所) となって刊行される。

本書は2の成果の一部で，インド・チベットの図像研究にとって最も基本的な資料のひとつ，「法界 [語自在] マンダラ」(ダルマダートゥ・マンダラ＝Dharma-dhātu-vāgīśvara-maṇḍala) の一般構造・各尊格の記述・今後の図像研究——特に尊格の同定——に不可欠の精確な白描・テキストの註解，を示そうとするものである。

図像研究班では，どの図像が Asianized India において最も基本的であるか，又，どの図像が文化複合をトレースするのに適切であるか等について，様々の角度から検討を重ねた。その結果，「法界マンダラ」が最適の研究対象のひとつとして浮かび上がった。そこにはタントラ仏教に登場する神々の大半が含まれており，又，儀軌等の文献の裏付けを取ることができる。そして何よりも，このマンダラはカトマンドゥ盆地で「生きている」からである。幸い，昭和60年度国立民族学博物館の教官による海外標本資料収集の際，研究代表者が，ネワール仏教徒によって保たれているダルマダートゥ・マンダラ及び各尊白描を購入することができた。これらは現代ネワールの仏画師ガウタマ・ラトナ・ヴァジュラーチャーリヤ氏の筆になるもので，ネワール仏教徒に広く受け入れられている図像と考えられる。これらは標本番号 H133592～133759 及び NME 149445～149492 として国立民族学博物館に現有する。図像研究班の狙いにほぼ合致するもので，本研究はこれらの資料を出発点としている。

上記の資料は，図像研究班の検討結果に違わず，ネワールの人々の間に生き続けた「法界マンダラ」として有用であり，ネワール仏教理解にとって貴重な資料である。しかし，インド・チベット図像研究の基本的資料としては，ややネワール的変容がきつすぎ，又，テキスト読解能力の問題もあって，逐一文献と突き合わせると不一致が目立つ。班の作業はこれを洗い出すことから始まった。そして，それがどのような原

因で不一致をきたしたのか，どのように修正すればテキストに一致するのか，又，修正することによってマンダラの構造に不都合を惹起しないか，等々を検討したのである。我々が修正すべきと考える点はほぼ全ての白描に及んだが，これを逐一ガウタマ氏に照会して，部分的描き直しを要請した。これらの諸点——特に，ネワールの伝統に反するとしてガウタマ氏が描き直しに同意しなかった部分——の詳細は本書テキスト解説または註に示してある。又，実際の儀礼ではどう扱われるのか，等も，現地調査の度に実地に確かめた。このネワール独自の変容や儀礼への応用方法もきわめて興味深いが，これについては稿をあらためたい。

このような幾度にもわたるやりとりの後，インド・チベット仏教にとって最も基本的な形式として我々が再構成したのが，本書に示す白描である。今後の図像研究にとって或るスタンダードを示すことができたと自負する所以である。

研　究　組　織　[表][1)]

氏　　名	所　属　・　職	役　割　分　担
長　野　泰　彦[2)]	国立民族学博物館・助教授	総括・チベット文法学の成立
岩　田　慶　治	大谷大学・教授	仏教の成立
北　村　　甫	麗澤大学・教授	ネパールにおける言語接触
飯　島　　茂	東京外国語大学・教授	ネパールにおける文化変容
石　井　　溥	東京外国語大学・助教授	ネワール社会構造の変容
頼　富　本　宏[3)]	種智院大学・教授	チベット図像研究
小野田　俊　蔵[4)]	仏教大学・助教授	チベット蔵外文献の成立
田　中　公　明[5)]	東京大学・助手	チベット図像研究
沖　本　克　己	花園大学・助教授	インド仏教のチベット的変容
西　岡　祖　秀	国際仏教大学・助教授	チベット仏教の生成
八　神　由布子	東海仏教学会・研究員	チベット宗教儀礼
安　藤　嘉　美	東海仏教学会・研究員	チベット宗教儀礼
谷　口　富士夫	名古屋商科大学・講師	インド仏教の北漸
森　　雅　秀	名古屋市立看護学校・講師	チベット仏教の南漸
佐　藤　喜　子	日本印度学仏教学会・研究員	インド仏教の成立
関　根　康　正[6)]	学習院女子短期大学・助教授	南インドの村落儀礼
立　川　武　蔵[7)]	名古屋大学・助教授	ネワール仏教の構造分析
井　狩　彌　介[8)]	京都大学・助教授	インド宗教儀礼の変遷

佐々木　高　明	国立民族学博物館・教授	インド東北部の文化接触
藤　井　知　昭	国立民族学博物館・教授	ネパール中間山地民の音楽と芸能
森　田　恒　之	国立民族学博物館・助教授	インド文献・絵画の非破壊分析
栗　田　靖　之	国立民族学博物館・助教授	インド東北部の文化接触
永ノ尾　信　悟	国立民族学博物館・助手[9]	ビハールの宗教儀礼
田　中　雅　一[10]	国立民族学博物館・助手	インド社会構造の比較

1) 62年度の組織を示してある。
尚，60・61年度中にこの研究に参加していただいた方々は以下の通りである。西　義郎（愛媛大学），森安孝夫（大阪大学），樋口康一（京都大学），ソナム・チュンペー（東洋文庫），原田　覚（東方学院），前田　縁（日本西蔵学会），島　岩（名古屋大学），勝野睦（東海仏教学会），矢野道雄（京都産業大学），渡瀬信之（東海大学）。
2) 61・62年度代表者。
3) 62年度のみ。
4) 61・62年度のみ。
5) 62年度のみ。
6) 61・62年度のみ。
7) 国立民族学博物館併任教官。
8) 国立民族学博物館併任教官，60年度代表者。
9) 62年12月から助教授。
10) 61・62年度のみ。

［謝辞］　この共同研究に深い理解を示され，共同研究員の班研究参加を快諾された各所属機関に対し，心から御礼申し上げたい。館外共同研究員の協力無くしては，この資料は成らなかったからである。

口絵1は田上仁志氏，口絵2は横田憲治氏の撮影になるものである。おふたりの御助力に心から御礼申し上げたい。

又，当館情報管理施設の諸氏には，資料の管理につき格別の配慮をいただいた。

最後に，本書刊行審査の労をとられ，有益な助言を惜しまれなかった刊行物審査委員会及び出版委員会――わけても，詳細なコメントを下さった審査小委員会の友枝・崎山・八杉3教官――に対し，深甚の謝意を表したい。